

学生時代の至福の時は、図書館の書庫に入り日頃読まない本を渉猟し、書庫の脚立に座ったまま長い時間論文を読む時間だった。自分が読みたいと思った専門書を手に取り頁を繰ると、決まって同じ筆跡の書込みに出会うことがあった。どの本でも勉強していくと書込みと同じ所で躓き、疑問を持つ。確認するうちに、その書込みが間違っていないか挑戦的に読み始める。一体この人はどれだけ自分の先を歩いているのかと焦りを感じさせることが幾度もあったが、そのうちその筆跡に出会うことが減り、書庫からも遠ざかった。数年前に大きく研究テーマを変えようと、原点から基礎勉強をするため図書室で再び専門書を捜した。その時かの筆跡に再会した。この間20年、この人はどこにいたのか、あるいは私がどこを辿っていたのか。両者の軌跡が過去と未来で会合するという、時間軸の異なる過去と現在が輻輳的に横断的に交わる一瞬であった。このような過去の読者と

の会合は、図書が持つ多重の時間を越えた研究交流・指導の妙味であった。

2000年代に入って論文が電子化され、冊子が次々と図書館から消えた。さらに専門書も電子ブックとなり始めている。電子化されていない論文誌はその配布性と国際評価から価値が下がり、論文投稿が減り、「出版も危うい事態にまで至っている。この時点で電子化しアーカイブしても、新たな価値を付与しなければ検索でもはや顧みられない。グローバルな出版による電子化がローカルな研究コミュニティまでも崩壊させている。

出版の電子化は、確かに、ノートパソコンに研究者が一生読み切れない程の論文や本を持ち歩け

## 図書と電子データ環境



引原隆士

るまでにし、過去に入手不可能で探すことすらできなかった文献を、ネットワーク上で入手可能としている。昔なら、単語を覚え間違いして搜した本を見て苦笑しつつ、結構面白くそこから新しい思考を始める事もあった。しかし、ネット検索では、「ひょっとしたら〇〇〇ですか？」と修正を確認してくる。間違いは強制的に修正されて、「関係ない」論文や本に出会う、「時間の無駄」を省くよう「サポート」してくれる。あまりに効率的である。一見無駄に思えても手に取って渉猟し、間違いから触発され新しい分野を切り開く、そういった科学技術の根幹をなす知的活動が図書館の効用であるが、無限に近い質の高低のある情報を同列に示す検索エンジンは未熟な司書でしかない。残念ながら、図書を介して過去の読者と会合するような状況はこの電子ジャーナルや電子書籍の世界では未だ生まれていない。

さらにデータベースの動きから研究の方向性を探索し、研究機関の管理者に予算申請を助けるシステムを論文出版が売り込み始めている。研究の方向性に関して、流行に敏感な人とそうでない人、国家、機関間の技術レベルを縮めるツールにもなりえる。しかし、データベースはインパクトファクターの様に一律な価値観の押し付けになる危険をつねに孕み、知的活動の本質である多様性に迫っているとは言いがたい。そこがビジネスの本質との相容れない姿であろう。

夏の昼間、寺の境内に入って濡緑で本を読んだゆったりとした時間はもうない。これからの人は、電車で検索し借り読みじたごとを同じ様に思うのだろうか？

(ひきはら たかし 京都大学大学院 工学研究科電気工学専攻 教授)